早稲田大学原理研究会の寮に文鮮明先生をお迎えしたのは、1965年10月8日のこと。神の再臨摂理や自己修練、早稲田・高田馬場での思い出を語られた後、「天宙成寮　早成勇士」という揮毫をくださいました。当時、早大原研のリーダーをされていたのが飯野貞夫先生です。今号では飯野先生から、1965年当時の様子と文先生との印象的なエピソードについてお話を伺いました。

Special Interview

南北米福地開発協会 会長

飯野　貞夫先生

いつの時代も青年が希望
文先生を慕う心情世界を

——統一原理に出会われた当時の様子を教えてください。

私が統一原理に出会ったのは1965年1月末、文鮮明先生が第1次世界巡回路程で日本に滞在されていた期間のことです。早稲田大学の図書館で全国大学連合原理研究会のパンフレットを拾ったのをきっかけに、み言を学ぶ機会が与えられました。それは、A3サイズのわら半紙に手書きで「終末の時が来た」と書かれたガリバン刷りのパンフレットで、修練会への参加を呼びかけるものでした。その文章にも惹きつけられましたが、中でも持ち物に挙がっていた「聖書」という文字に注目しました。なぜなら、その当時の私は「聖書を学ばなければならない」と思っていたからです。

そう思うようになったのは、半年間に順次会った3人の人との出会いがきっかけで、3人目に出会ったのはカトリックの中学校に通う女の子でした。私はその子の家庭教師をしていたのですが、ある日、その子から聖書の時間の宿題について、どう考えるべきか聞かれました。それは、アブラハムのイサク献祭の部分を読んで感想文を提出するというものでした。私は、「イサク献祭にかけられた神の深い意図があるのだろう」と思いはしましたが、聖書を何度読んでも神の願いがよく分からず、お茶を濁したようなそれなりの返答をしました。その出来事が、その後も私の心の中で引っかかり、聖書を学ばなければならないと思ったのです。

修練会でキリスト教について学べるのだと思った私は、パンフレットに書かれた電話番号に電話をかけ、み言を学ぶようになりました。復帰原理でイサク献祭について学んだとき、「このみ言を解かれた方は偉大な方だ」と実感するとともに、神もアブラハムも、ものすごく身近に感じられました。

その修練会には、級友の杉山勝行氏を誘って参加したのですが、彼も後に私と同じ777双の祝福を受けました。

——1965年10月8日、文先生を早大原研の成和寮（後の早成寮）にお迎えした当時の様子を教えてください。

第1次世界巡回路程を勝利された文先生は、その年の9月末に再び日本を訪問されました。当時の私は、早大原研委員長のバトンを渡されたばかりでした。東京の松涛本部で文先生にお会いし、夢見心地の時を過ごしていたところ、10月8日の早朝、電話で早大原研の寮にもお越しになられることを突然知らされました。直ちにメンバーと内外の準備にかかりました。リーダーとしてあまりにも未熟だと感じた私は、掃除をしたり片付けたり、外的にいくら準備しても心が落ち着かなかったため、風呂場に飛び込んで水ごり（水行）をしながら必死で祈りました。なぜなら、再臨の主をお迎えするという歴史的大事件を前に、少しでも清く、罪を悔い改めてお迎えしなければならないと感じたからです。凍えながら30杯ほど水をかぶったとき、私は聖霊体験をしました。突然、白金色の光の玉が私の口の中に飛び込んできて、お腹の奥深くに入ってきたのです。

その瞬間、全身に沸き起こる熱い感動と心の底からの悔い改め、赦しの愛に包まれ、とめどもなく涙が流れてきました。気がつくと20分ほど祈っていたようです。聖霊の恵みに励まされて文先生をお迎えできたので、深い心情の因縁を結ぶことができました。

その夜、早大原研のメンバー以外にもたくさんの兄弟姉妹が集まって来ました。8畳の2間続きの部屋に、廊下と庭がついた会場は兄弟姉妹でいっぱいになり、熱気で溢れかえるようでした。兄弟姉妹を優先して入れたため、私の入る場所がなくなるほどでした。

文先生は日本留学時代、誰にも理解されない天の道を求めるがゆえに、警察の拷問を何度も受けられました。「電信柱の一つひとつに先生の涙がこもっている」というみ言など、高田馬場を歩まれた当時の様子をしみじみと語られる文先生の苦難の道に胸を打たれました。そして、再臨の主がおられる同時代に同じ母校に導かれたという衝撃的な恩恵と、文先生のおかげで今の私たちがいるとはっきり知りました。そして早大原研のメンバーが、文先生の願いを先頭を切って果たさなければならないという使命感を強く持ちました。

私は早大原研を代表して感謝の思いを込め、校歌が流れる大隈講堂のミニチュアのオルゴールを文先生に差し上げました。いったん笑顔で受け取られたのですが、「先生が来た記念になるだろう。先生から君たちへ」とおっしゃられながら、そのオルゴールを私たちにくださいました。差し上げた物を突っ返されたのではなく、私たちと心情の因縁を結ぶために与えてくださったのです。単なるオルゴールが、再臨の主からいただいたオルゴールになりました。これは早大原研の宝物である以上に、日本の宝物です。

——当時の活動について教えてください。

普段の活動は学生や教授たちにみ言を伝えるのがメインでしたが、学内講演会や展示会などのイベントも企画しました。1965年5月には、久保木修己先生をお迎えし、「心情の世界」と題する講演会を開催しました。この講演会には、さまざまな見解の人たちが集まりましたが、裂帛の気迫で神を中心とした心情教育について訴える久保木先生の講演は好評で、反対したり、邪魔したりする人はいませんでした。これはひとえに、久保木先生の人格・人徳が大きかったからだと思います。秋になると早大だけでなく、首都圏の大学を周り、太田郁恵さん（太田洪量・元原研会長夫人）が心を掴む歌を歌い、私が前座の挨拶をして久保木会長を紹介し、万来の拍手の中、久保木会長が登壇して講演をするというパターンで巡回講演が行われました。

教育学部で歴史を学んでいたこともあり、み言を知るまでは歴史学研究会というサークルに所属していました。そのサークルでの活動は、もっぱら唯物史観の勉強でした。原始共産主義社会から始まり、最終的には共産主義社会になるという分かりやすい暴力革命を肯定する歴史観ですが、私にとって根本的に違和感を感じたのは、その思想が神を最初から否定していたことでした。私は小さい頃か

ら「神はおられる」と実感していましたので、「神はいない」と言われても、理性では整理をして聞くことはできましたが、心情では納得していませんでした。

　また当時は安保闘争のまっただ中で、左傾化した学生たちの学内闘争が激化していく時代でした。時には殴り合いや、階段から平気で蹴飛ばし落とす暴力も横行していました。自治会をめぐる左翼学生たちの激しい権力闘争が繰り広げられ、論争で終わらず、暴力闘争が起こる荒廃した学内になっていきました。神否定の思想が蔓延する中、私たち原理研究会では同年11月の早稲田祭で、「神は生きている」をテーマにした展示会を行い、神の実在について堂々と証ししました。会期中、会場には１５００名を超えるゲストが訪れ、ものすごい熱気でした。

　夕方には毎日、新宿駅東口で路傍演説をしながら伝道活動をし、それを終えて寮に帰ってくると、夜には反省会をしました。早大原研の初代委員長だった尾脇準一郎氏は、私を後継者にしようと考えてか、一人ひとりの兄弟姉妹について夜の１時、２時まで二人だけで膝を突きつけて話し合いました。一人ひとりに心を配ることの大切さを身をもって教えてくれました。こうして１９６５年９月から私が2代目の委員長を引き継ぎました。このような内的な結束に神が働き、たくさんの学生たちにみ言を伝えることができたのだと思います。

——世界各地で歩まれた際、文先生から直接ご指導を受けられたそうですが、文先生はどのようにメンバーたちをご指導されたのでしょうか。また、文先生との印象的なエピソードを教えてください。

　一般的に言って、文先生はたくさんの兄弟姉妹を集められると、３時間、４時間、５時間と、とことんみ言を語られます。公的な場に立たれると文先生は、み言を伝えなければならない立場に立たれると同時に、私たちと心情の因縁を結んでくださるためにも長くみ言を語られます。これは、文先生の最大の愛の表現なのです。しかし問題は、公的に語られたみ言や文先生との出会いを、受け取る側の状態によって異なった解釈をしてしまうということです。

　１９７１年、私の妻（絢子）が原因不明の病気で、ほとんど寝たきりの状態になってしまう出来事が起こりました。近くの病院に連れて行くと、医者から「命の保証はできない」と宣告され、私は覚悟を決めなければならないと思いました。

　そんなとき、日本の幹部たちが訪韓して文先生にお会いする恵みにあずかりました。会議の途中、文先生が突然、「飯野！」と私を呼ばれ、「絢子をすぐに韓国に連れて来なさい。こちらで過ごしたら元気になるよ」とおっしゃられたのです。妻のことを文先生に報告した覚えはありませんでしたが、文先生はすべてご存知のようでした。

　妻は、病院の最終審査の結果が出ないうちに一人で訪韓し、水澤里の中央修練院の敷地内にあった文先生の宿舎で療養生活をすることになりました。文先生は毎日のように妻に声をかけ、娘のように温かく気遣ってくださいました。妻は2か月ほどで元気を取り戻し、霊肉ともの生命を与えられました。

　このとき、文先生から直接に愛を受けたのは妻ですが、一個人で愛を受けたということではありません。文先生は、天宙を主管しなければならない立場に立っておられます。しかし、肉身は一つしかないため、相対する代表を立てて愛を表現されます。愛を受けた者は、その如くに愛を周囲に広め、証ししていく立場に立ちます。神の国とは観念的なものではなく、具体的な善の繁殖によってもたらされるものなのです。

　特にリーダーは、歴史的な因縁でその立場に立たされていることが多いため、歴史的な責任を担っていることを自覚する必要があります。個人的に愛された云々というレベルで物事を捉えてはいけません。文先生は「責任者が責任を果たせば、その国は栄え、責任者が責任を果たさねば、その国は滅びる」とおっしゃっています。一つの行動が神に用いられるかどうかは、その瞬間に決定されるのです。

　アブラハムの象徴献祭もそうです。祭物を裂くか裂かないかというわずかなことが、歴史を左右する結果を招きました。これは、アブラハム以外の人であれば、何の問題もなかったのです。神が用いられた立場、歴史を代表する立場に立たされたアブラハムだからこそ、一瞬の行動が歴史を決定づけることになったのです。文先生が私たちを指導されるとき、私一個人として見つめられるのではなく、より大きな視点で見つめられます。

　また文先生は、「縦横の８段階を勝利しなければならない」とおっしゃられ、予想すらできない人事をされます。１９９９年８月、私たち国家メシヤを南米に突然呼ばれ、パンタナールのレダ地方の開拓を命じられました。このときは、言葉では言い表せないほどの衝撃を受けました。家族を残し、何の保証もない未開の地に行くわけですから、私のみならず、家族もろとも祭物の立場に立たせられました。

　このような環境を感謝で乗り越えるには、復帰の原則をはっきり知らなければ本当に難しいのです。縦横の８段階を復帰する道は、登っては下り、また登っては下るというように、最高と最低を経験しながら、自分自身を分別していく歩みです。そして、サタンを自然屈服させる歩みでもあります。地獄を通過するような環境が与えられる背後には、間違いなく神の祝福が準備されています。その祝福を信じられるかどうかが、信仰というものです。現在、開拓から14年が経ち、「ために生きる」実践をした結果、レダはパラグアイ大統領が直接訪問されるほど、国から歓迎されてきています。

　繰り返しますが、神は私たちに祝福を与えようとしておられます。この祝福を正しく受け止められるかどうかは、受け取る側の姿勢次第です。感謝の心があれば、神の祝福を正しく受け取ることができます。一方、妬みや嫉妬、私利私欲にとらわれていれば、神の祝福が曇って見えなくなり、正しく受け取ることができなくなります。そして、託された責任の重さも分からなくなってしまうのです。

——最後にメッセージをお願いいたします。

　いつの時代も青年が希望です。特にＣＡＲＰメンバーは、国家的・世界的なリーダーになっていかなければなりません。そのためには「志」が必要です。志があるからこそ、日々努力し、成長し続けることができます。もちろん、初めから志を持てるとは限りません。私もそうでしたが、み言を学ぶ中で世界に飛び出して行こうと思うようになりました。その思いの根底に、「神のために貢献したい」「文先生ご夫妻の前に忠孝をお捧げしたい」という心情があったからです。統一運動の未来も、天宙復帰も青年にかかっています。青年が希望に燃えていなければ、今後の行く道が見えてこないでしょう。

　また、将来に備える意味で一番大切なことは、文先生ご夫妻を「真の父母様」と実感するまで、慕う心情、恋いこがれる心情世界を開拓することです。もちろん、人それぞれ個人差や性格の違いなどあるため一律にはできませんが、それでも若い頃から文先生ご夫妻を慕う心情世界を育むことは生命線であり、父母と子の実感は絶対に必要です。

　文先生ご夫妻は、遠いところにおられる方ではありません。文先生ご夫妻を慕う出発点は、関心を持つことです。これは、文先生ご夫妻に直接お会いできる、できないに関係しているわけではありません。クリスチャンは、肉体の見えない２０００年前のイエス様を慕って今も歩んでいます。関心を持てば、心情の世界が深められていきます。皆さんの心のあり方次第なのです。

　理性も大切ですが、豊かな心情を持つ人になっていきましょう。皆さんのご活躍を期待しています。